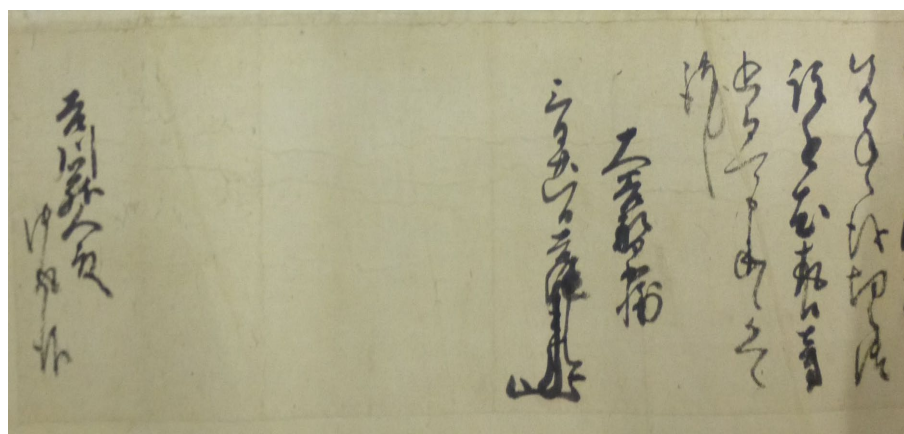
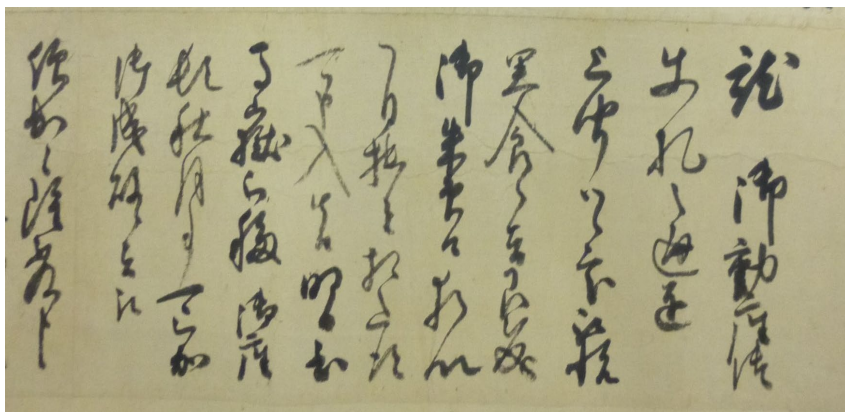


吉川史料館たより

第83号
2023年
(令和5年)
4月22日
土曜日

展示品紹介



大谷吉継書状

(吉川家文書七〇七号)

三月二十八日付

発行所

吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七一三

郵便番号 七四一〇〇八一

電話番号 (〇八二七) 一四一〇一〇〇

今回、展示品紹介するのは大谷吉継の吉川経言(広家)宛の書状です。

(釈文)

「就御動座、御使札之通、遂、上聞候之處、被悦思食之旨、即被成御朱印候、猶以自拙者相意得可申人由候、明日、至馬嶽被移御座、頓秋月事、可被加成敗之旨、被仰出候、雖不及申候、先手之儀、切々御註進尤存候、旁追而可申述候、恐々謹言大谷刑部少輔 吉継(花押)」

吉川蔵人殿

御返報」

(現代語訳)

「御動座(秀吉の進軍)に応じて、あなた様より届けられた書状を上様にお見せしたところ、大変喜ばれ御朱印状を下されましたので、お届けします。

そのうえ、私にも秀吉の意をしっかりと伝えるように申しつけられました。秀吉は明日にも馬嶽に移り、すぐにも秋月攻撃を加えるとの仰せです。申すまでもありませんが、先手を勤めたいとの要望を寄せられていることは素晴らしいと存じます。追って作戦等を連絡します。

吉川蔵人殿

吉継

」

吉継は、秀吉の側近である大谷吉継のことで、この蔵人とは、吉川経言(つねのぶ)のちの(広家)のことです。年号が記されていませんが、上様(羽柴秀吉)の九州平定のひとつである馬嶽(大分分県)攻撃について記されているので天正十五年(一五八七)と推測されます。

秀吉の九州平定は、天正十四年より開始され、多くの武将が参加し、そのなかに吉川元春、元長、経言もおりました。

同年の十一月、元春は、九州の小倉の陣中で病没しましたが、経言の兄・元長は、兵士の士気の低下を避けるべく陣中を離れませんでした。

元春は、軍事第一の武将で、子供らにも「毛利元就の孫、元春の子」として恥ずかしくない振る舞いを求め、自身も毛利元就が危篤の時、大事な戦いの陣中から離れませんでした。

広家は、家督前経言と称しており、父元春から見ると取るに足りない行動が多々あり、よく注意されていました。

元春の熱心さは残されている文書からひしひしと伝わります。

その結果、広家は秀吉の配下として先陣を要望するような勇ましい武将に成長したのです。

(原田 史子)